

# 「尾崎大明神御本地」小考

坂本美加

『尾崎大明神御本地』（阪口弘之氏蔵）は、青色表紙、大本の写本一冊で、尾崎神社の本地にまつわる類似した物語が二つおさめられている。前者は内題に「尾崎大明神御本地」とあり、後者は「尾崎明神之由来縁起写」とあって、本文末尾には弘化五年の年記が認められる。この尾崎神社に関わる二つの物語から、「尾崎大明神御本地」の位置づけを試みる。

この二つの物語は、尾崎明神、現在の岩手県釜石市浜町にある尾崎神社の祭神について語るものである。尾崎神社は、日本武尊、綿津見神を祀り、閉伊郡の領主源頼基を合祀している。本神社の縁起の中でも、この神は主として海上の守護神として崇拝されてきた。この、神社に合祀された、閉伊の郡の領主源為頼が明神として祀られるまでの物語が、「尾崎大明神御本地」として語られるものである。ここに登場する源為頼は、『尊卑分脈』によると、源為義を祖父にもち、鎮西八郎為朝の三男にあたる。為頼の祖父為義は保元の乱に、崇徳上皇に与して敗北し、京の船岡山で斬首となった。父為朝もまた、為義とともに上皇方に与して敗走し、捕えられて伊豆の大島へ流罪となっていた。為朝はさらに伊豆大島でも謀反を起したため、中央からの軍勢に攻められて自害しているが、『保元物語』、後世の諸物語で勇猛な武将として描かれている。その為朝の子、為頼をめぐる物語が、この本地

譚の根幹となっている。冒頭に記したように、阪口本『尾崎大明神御本地』の中に二種類のものを見ることができる。おそらくそれまでにあった閉伊頼基にまつわる物語が、一冊の本の中に筆写されたと考えるのが無難であろう。最初の「尾崎大明神御本地」をA、後の「尾崎明神之由来縁起写」をBとしておく。

## 内容比較

Aの本文は四つの段落から成るが、内容から三つに分けることができる。冒頭は、尾崎神社のいわれを説く本地譚の典型的なスタイルで始まっている。神社に祀られる為頼の系図を語り、現在南部閉伊郡に鎮座する尾崎大明神とは鎮西八郎為朝の三男である島の冠者為頼の遺廟であると説き起こす。第一の場面では、為朝の筑紫の国の横領を述べ、保元の乱の後に伊豆大島に流され、その後、大島の合戦で、朝廷軍に攻められ自害するまでを描く。続く第二の場面は、為朝の遺児の為頼、為家に目を転じ、為朝自害の後、大島を脱出した二人が、頼朝によって領地を安堵されること、後に閉伊の地で為頼が卒し、為頼の嫡子家朝が霊夢によって為頼の霊を尾崎大明神として祀るまでを描いている。第三の場面は、神託により浜島に遷宮したこと、為頼を慕い殉死した家臣七人の明神の名をあげ、尾崎神社の祭礼について記す。

一方、Bも、Aと同様に、「為義八男鎮西八郎為朝の三男島の冠者源為頼卿是尾崎の遺廟也」と説き起す。Aには、本文自体に段分けが見られるが、Bにはない。そこで、以下、Aにならって各場面内容を見ていく。第一の場面ではAをやや簡略化した形で頼基の系図を述べ、為朝の活躍から自害までを描く。第二の場面には為朝の自害の後、頼朝の時代となり、為頼らが頼朝の温情によって領地を与えられるまでを描く。第三の場面では、頼基によって、天、地、人の理が説かれ、各地の神々の名を語る場面が続く。最後は、病床に伏した為頼の遺言によって、棺が海中に納められ、為頼が海上の守護神と崇められたと語りおさめる。

A・Bの冒頭部分を比較するとよく分かるが、Aでは物語化の体裁が整いつつある記述となっており、Bでは第三に本地譚の特徴が顕著に表われている。おおまかにまとめると、第三の場面の記述がA・Bで変わる他は、ほぼ類似の物語展開を見せるが、どちらかといえば、AよりもBの方が、一、二の場面において叙述が簡略になっており、その分、第三の場面に分量が割かれている。しかし、両者の内容が重なる、一、二の部分を比較してみても、BはAの簡略版ではない。明らかに異なるものに基いており、時に全く異なった作者の視点で描写がなされている。たとえば、為朝の擾乱について、Aは為朝の勇猛な武者ぶりをまず描くものの、九州の国の横領を「終に九州を領して威風凜々として悪行日々に夜々に増長し」と言うように述べ、伊豆での謀反も「大島を我者とし、五島をとりひしき、島の大官令広沢岡ヶ島を押領し鬼神の丈一丈有余なるを奴とし、大島へ帰りいよく奢り強く逆意を深ふ且悪行甚盛也」とその悪行ぶりを強調するが如くである。

Bは、伊豆の謀反について「配所に移され武勇弥増り、矢次早に弓引事往古に倍せり」と述べるものの、その勇猛さ故に恐れられ、島の管領と仰がれることになったというように、やや突き放した表現になっている。為頼自身の描写については、Bが縁起としての性格を強めているせいか、より為頼崇拜を強めているのに対し、Aでは物語の展開に基づいて虚構化しようとしている点が見受けられる。為頼が頼朝に召し寄せられ、一度は誅せられそうになるが、却って領地を安堵され、という第二の場面の後半部においても、A・Bは為頼、為家兄弟と頼朝のやりとりを異なる筆致で描く。Aでは兄弟が頼朝の前に召し出されて誅せられそうになるが、弟の為家が頼朝を嘲る歌を詠んだことに対して、為家の無礼を咎めた為頼の人物を見抜いて頼朝が領地を与えている。しかし、Bでは、頼朝が為頼の人柄に感じたのではなく、頼朝を取り巻く家臣の助言によって領地を与えたという叙述となっている。このような視点の相違は、両者が物語を語る立場を異にしている反映といえよう。また、そのことは、この二つの物語が頼基をめぐる物語として同時に生み出されたものではないと言えるだろう。

#### 為朝伝承への志向

ここでもう一つ注意しなければならないのは、為朝伝承への寄りかかりといったものが存在するということである。この「尾崎大明神御本地」は、尾崎神社の本地譚として独自にはなりたっていない。冒頭には「夫奥州南部閉伊郡釜石村に御鎮座まし／＼尾崎大明神のいわれを委しく奉申に人皇五十六代の王孫清和天皇第六の皇子貞純親王の御子六孫王経基五代の後胤伊予守源頼義嫡男八幡太郎義家の孫六条廷

尉為義八男鎮西八郎為朝の三男島の冠者為頼の遺廟なり」とあるが、実際には、前半部分は、為頼よりも為朝の武勇譚を描写することに力点を置いている。尾崎神社の本地としてあるはずの為頼譚として成り立っているのではない。むしろ、後に述べる虚構化の問題とも関係するところであるが、為朝の子息という点で、為頼を神格化するが如くである。為朝説話を縦横に利用して、その勇猛な武将であった為朝の子息であることを強調して為頼の存在を浮かび上がらせようとしている。さらに言うならば、勇猛な武将であった英雄為朝像によりかかることで、一地方の伝承が中央にもつながっていることを誇示しようとしたといえるかもしれない。これはある種、為朝説話の地方伝播ともいえるものであろう。

ここでもう一度、Aの記述に目を転じてみる。そこで気のつくことは、Aが、事件の起こった年月日を詳しくのべ、さらに、為朝に出された院宣の内容までもを詳しく書き込んでいることである。為朝の記述は、『保元物語』に詳しく見ることが出来る。流布本系の古活字本（日本古典文学大系所収）の一部分をあげてAと比較してみよう。

・『保元物語』（新院御所各門々固めの事付たり軍評定の事）

城をせむるはかりこと、敵をうつ手だて人にすぐれて、三年が間に九国を皆せめおとして、をのづから惣追捕使に推成（こ）て、悪行おほかりけるにや、香椎の宮の神人等、都に上りう（こ）たへ申間、去（き）久寿元年十一月廿六日、徳大寺中納言公能卿を上卿として、外記に仰（おほ）て宣旨を下さる。

源為朝久住（し）宰府（に）、忽（し）緒朝憲（を）、咸背（こ）綸言（に）、梟惡頻聞（に）、

・A

狼藉尤甚。早可（し）令（む）禁（い）進其身（を）。依（つ）宣旨（に）執達如（し）件（の）云々。

然して後終に九州を領して威風凜々として悪行日々に夜々に増長し依（よ）て之香椎大明神の社官等上洛して此旨を訴ふ公卿詮議有て久寿元甲戌年十一月廿六日徳大寺大納言公能卿外記に仰て宣旨其文に曰

源為朝住（ち）宰府（に）忽（し）結（し）党蜜（を）悉（く）背（を）綸言（に）梟惡頻聞（に）へ狼藉尤甚早可（し）令（む）禁（い）其身（を）仍（し）宣旨如（し）件

この部分、Bに該当部分はない。文辞の完全な一致ではないが、内容的には通いあうところがある。さらに宣旨に着目すれば、『保元物語』の中でも流布本系の本文が参照された可能性が高いと言えるだろう。このように、先行の本文の記事を巧みに取り入れながら、物語が編まれていることが注目されるだろう。

物語の増幅

さらに、A、Bが類似のストーリー展開をとる中でAが増幅している部分についてふれる。このことは為頼の父である為朝の物語に顕著に顕れている。Aでは為朝の勇猛ぶりを生き生きと描いているのみならず、筆者はさらに菅相丞や将門を例にして為朝の首の怪異を語る。為朝の死後、獄門に懸けられた為朝の首が虚空に上がり、火炎を吐いたと記すのである。為朝の死後、『保元物語』では為朝の首は都へ送られ、獄門に掛けられている。Aではさらに獄門にかけられた為朝の首が怪異を起こしているのである。



の遺児である為頼、為家兄弟を家臣が大島から助け出し、匿う第三の始めの場面に、「為朝大島没する時、為憲、頼実二人を害す。三男九才四男七才に成り玉ふを、家臣、近能佐七郎親良是を具し、島を遁れ伊豆に隠れ居る。然りと雖、隠れ忍び難く、我妻をすかし、私か嫡子、九歳千歳と言、二男亀鶴七才成を我か手に懸て、為頼為家の身替に立官使へ偽り出す昔、源頼光の公達美女丸を助し藤原の仲光、子の幸寿丸を御身替りに立しよりも抜群に越たり。妻此よしを聞よりも絶兼、狂気の如く走り出、終に水に溺れ死失せけり」(注・句読点は私に付した)とある点なども挙げ得よう。家臣の子が身代りになったことを述べるに際して、幸若をはじめ、身代り譚としてもっとも知られた「仲光」の物語を例に出し、悲しみのあまりに死んだ家臣の妻の最期にふれている点など、この物語に虚構化の意識が働いていると考えられる。A・B両者の先後関係は無批判に述べることはできないが、Aを基軸に考えて、Bと比較すると、Aには内容の増幅を試みようとする意志が働いていることが確認できる。さらに言うならば、Aにおいて佐々木高綱が兄弟を養育するといったことも看過できない点であろう。

為朝の伝承への志向とともに、既存の物語を典拠として取り込んだ可能性のあることを先の二つの節で述べた。しかし、それ以上にAでは、神社の本地譚でありながら、為朝や、為朝の遺児である二人の兄弟の物語を、さらなる物語として再構築しようとしているようである。新たな挿話を加えて物語をさらに虚構化している点、そこにAの特色がある。

縁起は祀られる人物をより神格化するために、多くその人物の骨柄を常人ならぬよう美化し、虚飾化していく傾向がある。その点で、A、Bには、文章の簡略化の差異はあるけれども、共に、為朝伝承によりかかり、縁起、本地としての崇高性を志向しているといえる。しかし、Bが一つの縁起として一応完結しているのに対して、Aでは語り物とまでもいえないような未分化な部分が残され、その痕跡が残されていることが指摘できるのではないだろうか。為頼兄弟の身代り譚のように、まだ未熟さをみせながらも、物語化への志向を感じさせるところがある。一地方の口碑としてはじまった物語の多くが、語り物としての成長を遂げる前に消えていく中で、本作は一地域内での神社の本地譚が、うまく、周辺の伝承と結びついた例であろう。それは、本地という語り物がこういった形で生成されていくか、語り物としての本地譚の形成過程といったものを、萌芽として見ることができる。即ち、地方口碑が物語化し、成長していく一つの過程を見ることのできるものといえよう。社寺の縁起が語り物へと変貌を遂げかけている「本地譚」といってよいかもしれない。「尾崎大明神御本地」は尾崎神社に祀られた為頼の固有の物語に、為朝伝承をいりどることで本地譚として輪郭を明確にしてきた。本地が生成されてゆく中で、為朝伝承が変型、加工され、神社を彩る物語として成立していった例であると考えられよう。

〔付記〕本資料を御貸与いただき、本発表の機会を与えて下さった阪口弘之先生に深謝申し上げます。

〈翻刻〉

尾崎大明神御本地

夫奥州南部閉伊郡釜石村に御鎮座まし／＼尾崎大明神のいわれを委し  
く奉申に人皇五十六代の王孫清和天皇第六の皇子貞純親王の御子六孫  
王經基五代の後胤伊予守源頼義嫡男八幡太郎義家の孫六條廷尉為  
義八男鎮西八郎為朝の三男島の冠者為頼の遺廟也鎮西八郎為朝  
幼より故障有て九州鎮西府に趣き尾張權守家遠を乳父とし長  
となるに及(一オ)んて勇力他に越へ心猛威にして其丈七尺余也且弓  
勢にならぶ者なくして挑戦ふ事廿四ケ度築紫を討從ひ是に居し肥  
後国安蘇平四郎忠景の長子三郎三郎忠国の娘を妻とし島々を押領し  
自我として惣追捕使なりと号し菊地原田か城を攻落し取々の城郭を  
せむる事数十ヶ所然して後終に九州を領して威風凜々として悪行  
日々に夜々に増長し依之香椎大明神の社官等上洛して此旨を訴  
ふ公卿詮議有て久寿(二ウ)元甲戌年十一月廿六日徳大寺大納言公  
能卿外記に仰て宣旨其文に曰  
源為朝住ニ宰府一忽結ニ党蜜一悉背ニ  
倫言一梟惡頻ニ聞へ狼藉尤甚シ早  
可レ禁ニ其身一仍而宣旨如レ件  
官軍勅命を蒙り宰府に馳向ふといへとも為朝即座に追退け猶巍々  
として参路せず依之同二乙亥年四月三日父為義前檢非違使に解官す  
為朝此由を甚々残念に思ひ家臣順藤九郎(二オ)季政同惡七別当吉田

兵衛松浦兵庫同次郎同左仲越矢源太太野矢新三郎伊勢次郎太夫打手  
記八郎手取与次郎同与三郎高間三郎同四郎三丁礪元助村上軍兵衛此  
等を始として都合式拾八騎相具し上洛して父為義に従ひ保元丙子年  
崇徳新院の御謀叛に組し譽れを軍中に振ひ誠に本朝希代の弓勢也と  
敵も味方も是を賞賛す然といへとも其軍終に勝利を得ず敗北す是  
に依て父為義兄頼長叔父(二ウ)志田三郎義憲四郎左衛門頼賢掃部助  
頼仲加茂六郎為宗七郎為成同九郎為仲十郎蔵人行家此九人七條朱釈  
迦船岡山にて誅せらる為朝一人死を遁れ近江国和田の庄に隠れ郎等一  
人法師に仕立村里に出し食を乞求め折を伺ひ築紫へ下らんと欲する  
所に平家の侍肥後守家定大勢引率し発向の由風聞区々なれば昼は深  
山幽谷に入夜は民屋に押し入り浴室に至り残軀を養ひ爰に先達て勅  
命を蒙り佐渡兵衛重定五拾騎にて押寄せ散々に攻戦(三オ)ふ  
為朝防戦すといへとも多勢に無勢終に勝利を得ず大勢に被レ困生捕と  
成て上洛す公卿詮議有て保元丙子年七月崇徳新院讃岐国へ移し奉り  
鎮西八郎為朝かひちを切り伊豆の大島へ左遷す数月の中に筋骨氣力  
全快し矢速を引事式束に倍し物を舂る事其数に事ならず大島を我物  
とし五島をとりひしき島の大官令広沢三郎忠重か娘を妻とし剩へ永万  
元乙酉年三月鬼ヶ島を押領し鬼神の丈一丈有余なるを奴とし(三ウ)大  
島へ帰りいよく奢り強く逆意を振ふ且て悪行甚盛也狩野之亮  
茂光是を聞て嘉応二庚寅年春上京して此由を訴ふ公卿詮議有て伊豆  
武蔵相模三ヶ国の勢ひお以て誅戮すへき宣旨を蒙り狩野助茂光則勅

命を二ヶ国に馳れ馳向ふ大名には伊藤北條宇佐見平太同平次加藤太加藤次新田四郎藤内遠景此人々を始として都合其勢五百余騎兵船式拾余艘に乗浮へ嘉応二庚寅年四月下旬大島へ着到す為朝則馳向い大鎧矢十分に引しほりひやうとはなつ其矢水際を去ん(四オ)「事五寸計にして兵船を舳通す其矢穴より水入て溺れ死する者其数を知らず為朝語て曰保元の軍には矢一筋にて兵士二人を舳殺す嘉応の今は一矢にてそごはくの軍士を沈め殺すあゝ今は望み足りぬ現世に思ひ置事更になし南無阿弥陀仏と高声に唱ひ内へ入嫡子六条弾正為憲次男築紫左衛門頼実を近付汝ら二人敵の手に捕られんより父か三途の供せよと即座に切殺し柱に寄りて自害す然共眼清冷の如くなり官軍戦慄して近寄者更になし茂光(四ウ)「か弟嘉藤次景廉後へ廻り長刀を以て首打落す是高名の随一にして各帰陣す為朝の自害將に察すへし勇なる哉為朝行年三拾三歳にして卒す

### 辞世

極楽も地獄も爰にあるものを何く尋る身こそはかなき

### 法名

華嚴院殿前鎮西府大守持剣法空大貴士

狩野亮茂光嘉藤次景廉兄弟高名の旨伝奏する(五オ)「所内よりの宣旨には四条川原おゐて獄門に掛べしとの勅命を蒙り茂光景廉勅諚の如くす時に為朝の首眼を見ひらき怒て曰く汝等兄弟我死体の首を取り高名とするのみならず獄門にかくる事甚以て遺恨なり我忽ち恨

報ずへしと大に火焰を吐かけ忽ち茂光景廉立所に亡死す其昔菅相丞雷となり帝御恨み申時平大臣を取りしき又天慶庚子三年二月十四日平親王将門倭藤太秀郷に討れ京都に至り獄門に掛る其首三ヶ月迄生変せず夜(五ウ)「なく我五体いつくにかある首繼て今軍せんと言道を過る人は是を聞一首の歌を唱ふ

将門は米かみよりそ切られけり倭藤太か謀にて

と詠しければ将門か首からくと打笑ひ眼塞き其屍終に枯けるとそ為朝か首猶空へ飛上りて震動雷電して内裏の外辺に至る此時帝忽病脳玉体に入り御脳以外の外也依之時の典葉頭硯学文章博士及ひ安部安清是を考ふ違霊の祟也と奏聞す然るに異に当て黒雲起り雷光震動して更に止す是を(六オ)「制すれば為朝か靈忽然として黒雲に乗り現して曰我洛中に於て内裏へ仇し国土を乱すへしと言て電火稲妻猶止事なし山門僧正安部清明肝胆を砕き心腸を傾け是を祈ける内裏よりの宣旨には築紫に於て雷光大権現となすべしと勅命に依て遺霊忽ち亡ふ勅諚に任せ伊豆の大島に雷神の堂社を造営す時嘉応二庚寅年五月二日九州築紫に於て為朝の霊を祭祀すと云々(六ウ)「

天長地久武運長久福寿海無量

(梵字) 南無築紫雷光大権現祈所

息災延命国家繁栄皆令満足

為朝筑紫より大島へ左遷せられ此所に保元元丙子年より嘉応二庚寅年まで十五ヶ年住居し島大官令広沢三郎忠重か娘を妻として男子二人有



先妻は安蘇三郎忠国か娘に二人あり先嫡子六條彈正為憲次男築左衛門  
頼実三男島冠者為頼後に閉伊武者所頼基と名乗田鎖の元祖尾崎大明  
神（七オ）是也四男大島四郎為家也為朝大島没する時為憲頼実二人を  
害す三男九才四男七才に成り玉ふを家臣近能佐七郎親良是を具し島を  
遁れ伊豆に隠れ居る然りと雖隠れ忍び難く我妻をすかし私か嫡子九  
歳千歳と言二男龜鶴七才成を我か手に懸て為頼為家の身替に立官使  
へ偽り出す昔源頼光の公達美女丸を助し藤原の仲光子の幸寿丸を御  
身替りに立しよりも抜群に越たり妻此よしを聞よりも絶兼狂気の如  
く走り出終に水に溺れ死失けり親良（七ウ）急度思ひ出し江州へ行太  
守佐々木四郎高綱は天晴の義士なれはとするべを求め兄弟を頼けり高  
綱領掌して是を養育するに礼を以し愛する事子の如くす漸年月を  
送り人と成に及んで兄為頼武芸に調練し且は文学を好み日夜無懈怠  
文武兼備にして其丈七尺式寸父為朝と等敷勇力他に越へ眼目異相にし  
て脇の下に鱗六枚あり疑らくは是水神の再来なるやと言に弟為家  
も同し丈となり兄弟共に気量あれと驕らず高綱を父君の如く尊敬し  
厚く礼を以て（ハオ）年月を送る所に鎌倉將軍右大将頼朝卿天下を  
掌に握り日本六十余州惣追捕使に任官してのち或日佐々木四郎高綱  
に語曰鎮西殿息式人汝か館に居住と聞く対面せん鎌倉降参致させへ  
しと仰ける高綱辞するに不レ及命を請て近能佐七郎親良に告げる親良  
則両君を供奉して鎌倉に到着す頼朝卿対面あり頼朝卿曰兄弟は勅  
勘の身なり早く誅罰すへしと也小山判官是を承る時に北條四郎時政

畠山庄司重忠佐々木四郎高綱相共に是を支持て曰両君（ハウ）は將軍  
の家門いかてか誅すへきと再三に及んで許容ある時に為家頼朝卿に向  
ひ一首の歌を詠ず  
日頃より親の敵の頼朝を討も打れす切もきられす  
頼朝卿是を聞給へ大に怒て曰早く兄弟の者共誅せよ時に兄為頼眼を  
いからし弟為家に向ひ汝非礼也我自ら汝か首を討んと則大刀を拔ん  
と欲す一座驚きむなさきして是をとむ頼朝卿是を御説し為頼の  
心魂の切なるを見て我免許すへし且は為頼に領国を遣し守護たらし  
めんと欲す然共勅勘の身なれは近国に憚（九オ）る東国に内に領  
させん地あるや高綱答て曰氣仙閉伊の両郡あり右を為頼に賜る  
頼朝卿の曰く我伊藤か館に有し時よく雲の起るを見て家運を開く  
故に雲菱を以て幕の紋とす元来源家の紋は五七の桐に大中黒左右の  
雲菱日の丸立物は三ヶ月五輪の紫母衣を為頼に遣す世々嫡子二男  
迄是を用へし三男以下は五三の桐二引龍幕は皆白也猶為頼を改め  
閉伊武者所頼基と被成父為朝の嫡流たるへし且佐々木高綱か娘を  
妻と定むへし弟為家は家臣近能（九ウ）親良に被下近能内膳親勝と  
改佐々木高綱縁組の仰を蒙り則吉日を撰み閉伊頼基婚姻相整ひ  
在鎌倉の御暇給わり文治五己酉年春奥州閉伊郡に所知入有る道中十  
七日振にて宮古黒田に至る横山八幡宮は源家の氏神なれは参詣し根城  
に居館を造営す漸普請成就し移り此所に居住し玉ふ事数年臣を仕ふ  
に礼を以し民を恵み上を疎にせざる故に自然と四民共徳に和し父為

朝の臣策紫大島より馳集る人々には大田島源吾忠連猪狩右馬丞諸（十

オ）深広沢平馬丞忠季安蘇權太郎重休明石監物宗晴石関兵庫勝時也

頼基則相見て其忠義を感じ七千五百余丁の内を以て家禄を遣し畢

ぬ然るに頼基或夜の夢に桐の葉天に上ると見て語て曰く是祥瑞也我

勅勘の身たりといへとも戦場に馳向ひ一つの功を立なは父の尊靈へ

追善我又家運開き一門の嘉慶累代の誉ならんとて八島の磯に着陣す

平家の大將能登守教経に渡り合終に其首を取其外軍功高名世に挙て是

を知る此故に勅免を蒙り始めて（十ウ）喜悦の眉を開き且は法皇の

勅宣他の聞ひ先祖の尊靈への孝心此時とこそ申ん勅宣左ニ記ス

源頼基父子於ニ八島無二比類一勳感被思さ所也依以下散位

下上可為ニ陸奥出羽之受領一旨勅宣執達如レ件

建久元庚戌年十月鎌倉將軍頼朝卿上洛して頼基家朝父子へ勅宣の答

相済閉伊陸奥守頼基嫡子出羽守家朝参内し畢ぬ然後先祖代々の尊靈

へ追善供養の為七月七日より十三日まで七日か内修羅念仏を（十一オ）

始め玉ふ今言けんばい踊り是なり郷村の輩ら頼基の命を請て勤と云々

承久二庚辰年六月十五日未ノ刻閉伊陸奥守源頼基朝臣寿六十三歳に

て於ニ根城ニ卒去也家族里民慟哭せつと言事なし菩提所花原市村花

嚴院江葬る

法名 承久二庚辰年

雲冷院殿前散位下陸奥大守夏峯常誠大居士

六月十五日

頼基卒去の後家臣七人追腹を願 其文ニ曰

不肖等両君之御恩厚 蒙事海山よりも高く報レ之（十一ウ）何

以黄泉の供奉可ニ免許一被レ下ニ恐惶謹上

家朝願書を御覽し其厚志を感じ御落涙成留ても不レ止人々の相を御

見究め 則 免許せらる時に承久二庚辰年十月十五日御菩提所於下花嚴

院上追腹性名左ニ記ス

義山劍譽居士 近能佐七郎 雪山劍光信士 大田島源五忠連

実劍劍風信士 広沢平馬尉 法雪劍空信士 安蘇權太郎重休

冷性劍風信士 猪狩右馬尉 了真劍清信士 明石監物宗晴

枯峯劍了信士 石関兵庫 承久三辛巳年六月十五日（十二オ）

一回忌御弔御執行なり其夜家朝始家族郎從里老一同に瑞夢を蒙

り其外奇異の事共多ければ田鎖に新堀を構ひ夫より田鎖を以て家号と

す靈夢に任せ根城を形の如く造営して頼基朝臣の靈を尾崎大明神と

尊信奉り御長九寸の尊像を安置す迂宮の道師は和州長谷より天授院の

権大僧正下る則別当と成り御供領三百丁寄附せられ御祭礼は毎年六

月十五日也天授院権大僧正は則右馬頭源義朝の七男三河守則頼の二

男也（十二ウ）

男也（十二ウ）

日天増長武運長久天下泰平

（梵字）南無神宮尾崎大明神祈処

月天広目国家安穩五穀成就

月天広目国家安穩五穀成就



宝治二戊申年神託有て船越浦田の浜島に御遷宮奉り令荒神と申是也  
正応己丑年示現しての玉はく我其昔閉井気仙の主たり今夫れ両郡の  
堺に跡を垂て両郡守護すへしと也依之両郡の堺釜石浦白浜に奉遷  
宮一則南天授院是に住居す白浜の出崎青出の沖五町計り奥御殿御手  
洗流れ御堂あり御神木は藤也拝殿は五丁麓青出の入口(十三オ)に有  
り例年三月御神輿白浜の御本社より青出に渡御ある九月九日廿九日釜  
石浦拝殿引移数拾艘にて御神輿渡御也三日三夜の祭礼也十月白浜の  
御本宮へ御帰還也気仙郡唐鍬大明神の御同体也云々神徳天地共ニ  
輝事極りなし跡をたれ形澆季および尊信し奉事万々歳諸願成就皆令  
満足の所也

天下和順国家治平

尾崎大明神再拜再興祭祈度

息災延命子孫永久

願主

至徳三(マ)甲子年八月十五日

富沢与惣兵衛

松山権現は先祖代々の尊霊を祭る所釜石浦葛掛の(十三ウ) 観音は  
頼基公の北の方音羽姫也

閉伊郡七所の明神左記ス

一 国堺明神 近能佐七郎親良

一 小槌明神 大田島源五忠連

一 老木明神 広沢平馬尉忠季

一 川井明神 安蘇権太郎重休

一 川内明神 猪狩右馬尉諸深

一 小国明神 明石監物宗晴

一 川崎明神 石関兵庫勝時(十四オ)

右七所共に御宮の前に流あり其昔七人の忠臣義士の主功を感じ里老相  
議して七所の明神と崇祈す云々

一 尾崎大明神の御使白鳥也と言依て閉伊譜代の者白鳥を不食御神  
木は藤なり田鎖の末孫凶事ある時は藤不開弓矢に過有時は御手  
洗の水変じて紅と成祥瑞有時は家鳴云々

一 其昔頼基の御家領七千五百丁の内御寄付地

尾崎大明神 別当天授院 三百丁

御菩提所 華原市華嚴院 三百丁

一 華嚴院に頼基の什物宝物頼基の脇の下に鱗も有之云

大尾(十四ウ)

## 尾崎明神之由来縁起写

抑奥州五十四郡の内閉伊郡の内当杜尾崎明神垂跡和光の往古を尋るに忝も人王五十六代清和帝の嫡孫六孫王経基に七代六條の廷尉（判官）為義八男鎮西八郎為朝の三男島の冠者源為頼郷是尾崎の遺廟也嚴父為朝は勇猛拔群而已か躰芸の妙を得玉へ強弓の精兵百発百中の營を軍中に震ふ誠に希代の勇將也故に保元年中新院の為に随ひ戰場に（十五才）一名を顕し其委き事は保元旧記に見えたり世の人普く知所故爰に省く其戦ひ新院の御利運あらずして隠岐国へ移されさせ玉ふと言へり八郎為朝軍中の功戰場敵將平氏清盛公目さましく思ひ終に大島へ流刑す配所に移され武勇弥増り矢次早ニ弓引事往古に倍せり其勇猛精兵の逞敷を郷民共恐惶し招さるに集り終に島の官領と仰く也其上五島を随へ広沢庄司と言者の娘を妻として男子を儲くる事四人嫡子為憲二男頼実三男島の冠者為頼四男（十五才）大島四郎為家也然るに為朝故有て大島の脇異成へ渡り其島の異人を連来り奴となし仕ひ玉ふ世の人為朝は鬼を仕ひて我俣を振ふといへり此事近国に沙汰取々也其比伊豆の目代山木判官兼隆か相役狩野之介折節国に有しかは此事を急ぎ都へ訴ふ此時は平家四海に威を振ひ天下の武將たり源氏といわゝたとへ咎無とも其根をたゝんと思ふ折から成れは訴を聞とひとしく八十代高倉帝へ奏し公卿の詮議と言迄もなく朝敵の名を取りし為朝めし置く恩をも不知我俣を振舞事氣悔（十六才）な

り急ぎ征罰あるへしと狩野介に先陣を給り伊藤北條宇佐見久須見の官軍差向られ嘉応二庚寅年大島へ押渡り大に戦ふ官軍毎度利なくして為朝臣下に宣ふは百度戦ふて百度勝共差の差ならすといへり我官軍に向ひ強て闘ふ事武の道に背ぬ乍併平氏か讒奏を口惜しく思ふゆへに壹度は戦いぬ運命爰に極る時ならんと嫡子ト二男ト差殺し我身も自殺し玉ふ三男四男は七才五才にして乳人抱き其場を遁れ散々に成りしとかや為頼卿伊豆に（十六才）かくれぬ其後星霜漸く移り右大將頼朝卿日本六拾余州の惣追捕使となり玉ふ此時節頼朝卿鎌倉に來り佐々木四郎高綱天性仁愛深く其頃武州の別当として梶原相役なり為頼卿を憐み頼朝卿追々言上す幕府謂く伯父為朝は高倉帝の御時平家の讒と言なから朝敵の名あり此事広く沙汰あらは為頼か身の上に禍有ん然らば京鎌倉近き所にて菜地与へ難し出羽奥州の間に領地や有んと佐々木命じ尋玉ふ所高綱則奥羽両国の郷村を以て悉々尋（十七才）見る所東奥州閉伊郡に守護地頭領主なし頼朝卿幸なり為頼に与へん急ぎ連来れとて高綱をして為頼を内席へ招かしむ幕府宣ふと保元の昔予か父義朝王命もたしかたく禁裏召れ御辺の父為朝新院参り玉ふ兄弟敵味方と別るゝ事は乍併武門の家に生ては王命力不及事なり互に身の為確執あらす今御辺と我供に亡父の仇と思ふ事夢々不可有能こそ高綱に便給ふ幸佐々木に娘あり是を為頼に妻し件の郡を与へ地頭に（十七才）なすへしといと念頃の数々引出物給わり祝言し玉ふ為頼卿は一向に頼朝卿の中心の誠を感じ落る涙に袂をし



ほりあへす高綱喜悅（マ）限りなく吉日良辰をゑらみ為頼卿に加冠鳥帽子をを着せ娘を以簾中とし急き閉伊郡へ着岸あり田鎖村に住居し玉ふ

抑此為頼卿の事幼稚の昔伊豆に隠れ文覚聖人に付随ひ文武の道を能弁じ武の事は子房か記を尋諸葛亮の陣法をたし神道仏道を崇め其伝授を上人より得玉ふ天性寛仁大度にして又孔孟顔子（十八オ）の道を学び三民の撫育は仁を以て先とし威有て猛からず依之閉伊四十八郷の四民古今の郡主たりと囂繞渴仰するのみか近郡此威風に靡きぬ爰におゐて氏を閉伊と改玉へき

為頼卿下向の時付随ひ（割注・元享年中奥州の国司頭家卿に随ひ閉伊氣仙の人数随ひ野州戸根川の先陣戸井十郎は此嫡孫なり）家臣数多あり是皆父為朝卿討死のの砌り其供したる者共の其子或は其弟なり其内昆能親能と言しは羽翼の臣なり常々近勝語り給ふは夫武門の家に生れては古人のいへる三の理を（十八ウ）弁ふへし三つとは天の理地の理人の理是なり先地の理は我か今領する所の郡里郷村所々の地形を量り人々其器に依て郡邑の境を守らせ我居住の地の要害をよく取敷自然邪欲の者有て我領地を剪取らんとする共夫に危からざる如く心得る是地の理を知るなり人の理とは和なり身を正し上を戒しめ内を調ひ五常を以外を勤む故東夷の辺鄙なれとも其和に随ひ自から諸人其徳に習ふ此和は人の理なり天の理とは孤虚旺相支干是天地造化の大本根本たり第一相生相剋を本（十九オ）の源とするなり五行相生するは

平治天下の理相剋するは国しつかならず故に安きに居て危を忘れず此剋する所を能守る以て専一なり是は土と水との争へ障りの重き相剋と古人いへり先天一の水と天五の土との争ひ也天笠震旦日本まで九山八海とて九ツ山ハツの海也此理を汝に教んと宣ひぬ親勝喜悅にたへす唯一々委しく仰を承り忠勤を励さんと謹て是を聞為頼曰先日本には土の勢ひ権現と現れ給へ山々峰々に住玉ふ第一和州金峰山蔵王権現第二駿州富士権現第三加州白山権現第四越中（十九ウ）立山権現第五紀陽熊野権現第六羽州羽黒山権現なり第七豆州箱根の権現第八伊豆権現第九筑紫彦山権現是日の本の九山なり又水の勢は八海の龍王ことくく出世まし日本（マ）の明神と現し玉ふ第一常陸国鹿島明神第一尾張の国熱田大明神第三大和国春日大明神第四摂津の国住吉大明神五五安藝国厳島の大明神第六近江国白髭大明神第七信濃国諏訪大明神第八同国戸隠大明神是日本の八満也権現崇りをなし給へは国土を焼水神崇りをなし玉へば洪水ありこの（二十オ）争ひを相剋と言依て九山の権現八海の明神我か日の本の守護神にして其争ひを守らせ玉ふ然は国の守護郡の地頭却て武家たらん者は此神を其縁に随て信心専らにする事大切也鎌倉の右幕下此事を文学上人に能習ひ給へ左迂式拾四年の中より信心深く終に天下武家の棟梁となり玉ふ也我又神力を取事汝か知所なりと具に教戒し玉ひは近勝感涙限りなく為頼又宣はく我領地は海辺にして貢を納に田畑少ければ只漁を以て貢を備へて我か身又海辺の産たり（二十ウ）彼を思ひ是を思ふに幸ひ成かな明



神の第一鹿島の神靈は東国に地を、案玉ふ此神を深く祈らんとして年事  
良久しく鹿島の参詣怠り給わす深く信心の丹誠を運ひ玉ふ鹿島にて  
女神の告多く神人等も不思議をなせしと也常に信好の奇持も多かりし  
となり居住の庭に藤を植色をましへ咲を愛し玉へしとなり是は神体の  
事なりといふ伝り然るに 承久二年の春より病の床に臥し玉ふ  
然れ共其悩に情を奪れ玉はず臣等を内席に召て宣は今年六拾貳才な  
り命数果る期来(二十一才)らん常に鹿島の神靈を崇め敬ふ心中に大  
願ありその成就の至時ならん我誓て海上の守護神と成べし此奇瑞数  
多あり是併ら鹿島の神徳によるかゆへなり我卒しなは陸地に墳墓を  
築く事なかれ抑日の本の地形は東西に長く南北に短し是外龍のこと  
し所謂西南薩摩の磯如之首東北奥州の浜かくのとし尾の崎皆山  
をもつて形ちを顕し其尾は当所釜石の先なり此所へ布衣の装束を以  
て棺槨を海中に納め其所を 神社と仰くべし必陸地に神体を  
(二十一才)残す事なかれ植置し藤を我遺体と子孫に拝せよ隔年とも  
心霊は存する如くにて能国家の守護たらんと終に承久二庚辰年六月  
十五日未ノ刻に薨し玉ふ家族里民甚動哭す仰意に任せ釜石浦山の尾  
の崎海中を遺廟として尾崎大明神と祝し奉る此所を内宮とす国所の  
俗御室と言御山の御神体には常々愛し玉ふ藤を遷し植て是を御本社と  
し瑞籬を廻したる計にて拝敬す御室へは道俗男女詣る事不叶人跡絶  
たり釜石の湊より参詣の輩渡海するなり此御神の靈(二十二才) 験  
奇瑞不可枚挙海上の守護となり往来の船を守り此御神を祈る

風となり四民われくか願に実ありて祈る時は其願成就する事いちづ  
るし故ゆへに諸人喝仰の頭をかたむけ行程の遠近をいとわす貴賤  
僧俗男女あゆみをはこひ群をなす然共東奥辺鄙の海辺成は明神の神徳  
を仰く迄にして垂迹和光の昔を後世に取失ん事を歎き別当修験本山  
の行者天授院賢海権僧都その道を拾ひ老若男女の為(二十一才)に仮  
名字をもつて尾崎明神由来の縁起を印し畢ぬ

大尾

弘化五年

申三月三日

大黒尊天

弁財尊天

□□□□ (花押)